■戀は曲者（五巻）

帝キネ芦屋現代映畫

紹介　第二百拾貳號

外國の正喜劇に往々見受けるプロットで、日本人に可く題材ではないものを無理に例の芦屋式の御道化喜劇化したものだから助からない事は云ふまでもない映畫である。然し大森勝氏の監督はたはいもないながら眞心を持つて居る丈佐藤樹一路氏が監督した昨年度の二〇加に等しき御道化映畫より我慢が出來る。柳まさ子嬢のヒロインはなんと云ふ醜悪さだ。拳闘の場面に至ると全く悲鳴をトげたくなる。醜婦になる件りなど全體が醜悪だから見る者に目立つて利き目のないのは滑稽である。濱田格氏は芦屋獨得の御道化喜劇には無くてはならぬ人である。撮影やロケーションは綺麗である。

――山本綠葉――

興行價値――ヨタと出鱈目ケ所が面白くなる、大人でも子供でも婦人でも老人でもゲラゲラ笑はす事が出來る（十二月八日　大阪芦邊劇場封切）